

# かたりべ124

豊島区立郷土資料館・ミュージアム開設準備だより



左上・下 「時習小学校図書館」  
〈裏書に昭和二十六年十月十六日落成〉

右上・下 「椎名町小学校図書館」  
〈裏書に昭和二十六年七月二十五日落成、  
別に東京都豊島区椎名町小学校図書館  
昭和26.7.25の日付印〉

## 木村秀崇氏旧蔵写真にみる学校図書館事始め

木村秀崇氏は、一九四七（昭和二二）年三月に区長心得として東京都より豊島区役所に着任。以後、同年六月から助役を二期、一九五五年三月から七一年四月まで区長を四期務めました。同氏関係文書（当館蔵）は、これまでも、『豊島区議会史』や『豊島区史』の編纂に活用され、その後、ご遺族から資料を寄贈いただきましたが、今年新たに次男の木村克治氏から寄贈を受けた学校視察に関連する写真九一枚には、仮校舎での授業から、鉄筋コンクリート校舎やプール建設などの学校施設充実へと向かう戦後区立学校の姿が写されています。上の時習小学校（現朋有小学校の前身）と椎名町小学校の学校図書館写真もそのなかの一つです。

時習小学校内には、かつて一九二四年七月に和漢書三三九冊を蔵書に持つ御成婚記念西果鴨町簡易図書館が設置されましたが（『西果鴨町誌』）、一九四五年四月一三日の城北大空襲により焼失。その僅か六年後、一九五二年に両学校図書館が落成します。一九四七年公布の学校教育法施行規則に「学校には（中略）図書館又は図書室、保健室その他の設備を設けなければならない」とはじめて法令にその設置が明示され、学校図書館運動の活発化した時期でした。時習小学校図書館は面積一一・三七五平米、外光を取り入れる大きな窓と天井から吊り下がる照明が印象的です。戦後、文部省編『学校図書館の手引』で公共図書館・学校図書館で共通する分類法として推奨されたNDCを用いた案内板や、カード式目録ケースも見られます。当時の担当教員は「二十六年に区内で初めて図書館ができましたが分類・貸出カードと基本カードの記入、ラベル貼りなど細かい仕事が多く、係りの先生で夜八時、九時頃までやりましたが、結構楽しい時間でした」（『創立八十周年記念誌』）と語っており、児童の手記にも多く学校図書館の設置が記述されていることから、学校生活の一大事であったことがうかがえます。（郷土 甲田）

## 衛生と美容の日用品②—<sup>はえ</sup> 蠅との戦い 罎・武器・防具—

なんとも物々しい副題です。何を想像されたでしょうか。

今回は、私たち人間が蠅との攻防のためにどのような策略を練り工夫を凝らしてきたのか。ちょっと壮大な言い回しをしてしまいましたが、かつて使用されていた衛生の日用品とともに、その戦いを振り返ってみようと思います。

今から六〇年以上前、昭和二〇年代頃までの豊島区的生活は、現在よりずっと多くの蠅に悩まされてきたようです。

### ■行政の目指す「衛生豊島の確立」

一九四八(昭和二三)年の保健所法改正を受け、豊島区では一九五二(昭和二七)年、「衛生豊島の確立」をスローガンに掲げ、区独自の衛生対策を打ち出しました。それまでの区内は下水の汚泥や衛生な水たまり、路上のごみなどが町に悪臭と不潔を作り出し、一日に百も二百も獲れる蠅取りが日課であったそうです。

衛生相談員を設置し、保健衛生思想の普及とともに、ねずみ、蠅、蚊の駆逐に力が入られました。「カとハエ追放運動」の名のもと、蚊と蠅自体の駆除はもちろん、その発生源であるごみ問題にも対策が練られていきます。その勢いは東京オリンピックの開催決定によって、さ

らに大きくなっていきました。

都・区・警察・住民が一体となったこの取り組みから「追放」までとはいかずとも蚊・蠅の発生数の減少という一定の成果を得られました。

### ■各家庭の蠅との戦い

それでは日常生活のなかでは、どのような戦いが巻き起こっていたのでしょうか。郷土資料館の収蔵品のなかから3種類の道具をご紹介します。

#### (1) 蠅取り器【罎】

少し不思議な形をしています。写真①は「蠅取り器」といって、直径約二五cm程の道具です。家の中に置いて、蠅をおびき寄せて捕まえます。

仕掛けは簡単で、器の下部に塩水か米のとぎ汁などを入れておき、器の下に紙やお皿を敷いて、中央に食べ残しや砂糖、つまり餌を少しおいておきます。そうすると、餌におびき寄せられた蠅が上部の小さな口から入り

込み、そのまま外に出れずに水に落ちるといって蠅の特



写真①

性を生かした工夫がなされた構造です。

本資料ではなくなくなってしまっていますが、本来は赤の点線で示したところに蓋がついていました。

#### (2) 蠅叩き【武器】

その名の通り、蠅を叩いて退治するための武器です。現在でも金属製やプラスチック製の蠅叩きはありますが、写真②上は長さ五〇cm程で、シユロの木

の茎と葉を利用して作られています。シユロは庭木として植えられているのを見かけます。箒やたわしなど多岐に利用される身近な樹木でした。

写真②下の蠅叩きも植物を利用しており、竹を編んで作られています。この蠅叩きは、寄贈者村木由紀子氏のお母様が使われていたそうです。裁ち台の横

にいつでも手が届くように置かれ、蠅が出るやいなやさつと取り上げ、バチンと叩いていたといえます。そのため本資料には、よく使っていた証拠でしょうか、持ち手の部分にゆるくカーブができています。

#### (3) 蠅帳【防具】

近年では食べ残しや作り置き料理は、ラップをかけたり冷蔵庫に入れたりして保存しています



写真②



写真③

が、冷蔵庫が十分に普及していない時代まで、「蠅帳」という道具が使われていました。

写真③は五〇cm弱の高さがある棚です。周りが網で覆われており、蠅がたからず、かつ通気性も保たれた状態で衛生的に保存ができたのでしょうか。そうはいっても常温保存ですので、長期保存はできませんでしたが、蠅の攻撃から食事を守るための防具でした。

### ■戦いは今?

現在の私たちの生活にも蠅は決して珍しい虫ではありません。しかしながら、「一匹でも部屋に入ると気になる」くらいには遠い存在になったのではないのでしょうか。

近年では、蠅対策といえば殺虫剤や虫除けなどの薬剤が中心になっています。道具が変わりながら、今日もどこかで戦いが起こっているのでしょうか。(郷土 上田)





一九一七（大正六）年に信太郎の妹きくが結婚、婿養子を迎えて家業の米問屋の跡継ぎが決まると、翌年に父政次郎は家族を連れて神田から大塚の現在地に転居します。購入した約一八〇坪の土地には東西に二棟の住宅が建っており、鈴木家は東側の住宅に移り住みました。この建物は政次郎夫婦他、一〇名前後の大所帯で暮らすには手狭であり、西側に新居を建てるまでの仮住まいであったと考えられます。

転居の翌年に信太郎が木場の材木商

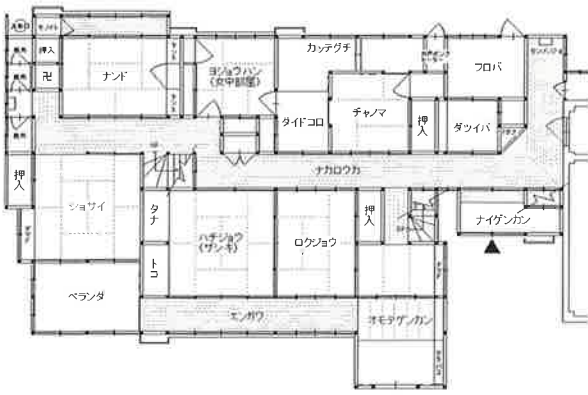


図1 1階平面図

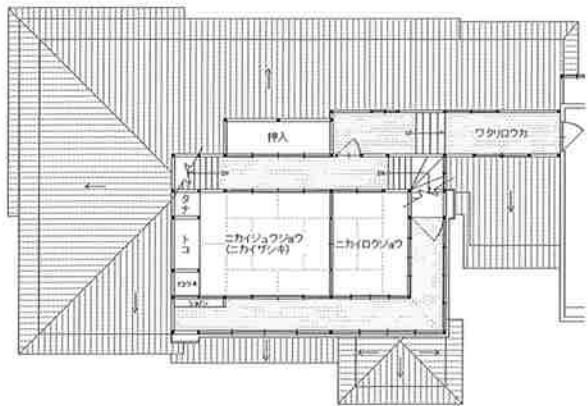


図2 2階平面図

「仲昇」の長女花子と結婚すると政次郎は敷地西側の建物を取り壊して新居の建築に取り掛かります。材料には「仲昇」から取り寄せた上質な木材を使い、一九二〇（大正九）年に木造二階建て、延べ床面積六六坪の新居が完成します。この建物は詳細な写真や図面等の資料が残っており、正確な姿はわかりませんが、信太郎の長男成文が作成した復元図があります。その復元図を基に二男道彦氏への聞き取り調査による修正を加えたものが図1、2の平面図になります。



図3 ベランダで椅子に座る信太郎

一階平面図を見ると、東西に長い廊下が走り、廊下を介して各部屋へと入るようになっていくことがわかります。こうした間取りは中廊下型住宅と呼ばれ、生活様式の洋風化に伴い、それまでの接客本位から家族本位の住宅へと移行する中で、中流層の住宅でよく見られた間取り形式です。中廊下の北側に風呂場、脱衣場、茶の間、台所、四畳半（女中部屋）、納戸（仏間）、便所といった水回りを中心に配置し、陽当りの良い南側に六畳と八畳の二間続きの座敷とベランダ（サンルーム）付きの書斎があり、二階には接客のための六畳・十畳の座敷が設けられていました。

全体としては、典型的な和風住宅ですが、唯一、他の部屋と異なるのは信太郎と花子の居室であったベランダ付きの書斎です。書斎には天井まで届くガラス戸付の本棚が立ち並び、その南のベランダと西側は床まで格子状のガラス戸のある開放的なつくりが特徴的でした（図3）。後に防犯のため、窓には鉄製の棧、南面にはアコーディオン式の鉄製格子戸が設けられました。天井まである本棚や開放的な窓といった特徴は、その後増築された書斎棟の原型といえるかもしれません。

この中廊下型住宅は建設時期や、信太郎のために洋風のベランダ付きの書斎が設けられたことから、信太郎をフランス文学者へと育て上げるために配慮された住宅であったといえます。その後、一九四五（昭和二〇）年四月の城北大空襲で焼失するまでの二四年間、親子三代で住み継がれました。（郷土 木下）

【参考文献】『フランス文学者の誕生』鈴木道彦、筑摩書房、二〇一四年／「住まいを語る」鈴木成文、建築資料研究社、二〇〇二年。

「旧鈴木家住宅」は、豊島区東池袋五丁目一に所在する歴史的建造物で、正確には「豊島区指定有形文化財（建造物）旧鈴木家住宅」という名称です。現在豊島区では、この建物を改修・整備して「（仮称）鈴木信太郎記念館」を開設する準備を進めています。

## 豊島区ゆかりの作家たち

豊島区では、戦前から今日まで著名な作家たちが暮らし、集い、活発な創作活動を続けています。大衆文学、詩歌、児童文学、童謡、童画、マンガなどジャンルは多岐にわたり、ゆかりのある主な作家だけでも百名以上になります。このコーナーでは、ゆかりの作家ひとりひとりをご紹介します。

### 洋画家・童画家 中尾彰

(一九〇四—一九九四)



独立美術協会会員。日本童画会会員。日本児童文芸家協会児童文化功労賞受賞(一九八二)

中尾彰は、豊島区を活動の拠点とし、児童文学と童画の融合の礎を築き、その発展のために活躍した画家のひとりです。中尾は、島根県津和野に生まれました。

少年期は、旧満州で過ごし、満鉄育成学校を卒業すると、一九二二(大正一一)年から島根県下で小学校や女学校の教師を、同時に東京都内では画学生という生活を繰り返していました。

独学で油彩画を習得した中尾は、設立当初から独立美術会員として活躍する一方で、子供のための美術を提唱し、児童書出版にも関わりました。一九三三(昭和八)年には東京都内にアトリエを構え、一九三九(昭和一四)年時点では東京府中野区江古田に在住であったことがわかっています(『日本美術家年鑑』昭和一四年版より)。一九五八(昭和三三)年には、練馬区に転居し、豊島区ゆかりの童話作家坪田譲治や坪田のもとに集まる若手作家たち(坪田主宰の童話雑誌『びわの実学校』同人)や寄稿したベテランの作家(浜田廣介・巽聖歌ら)との交流があり、彼らの作品に挿絵を添え、単行本の装幀をするなど多くの仕事を残しています。

第二次世界大戦中の一九四三(昭和一八)年には、長野県諏訪郡北山村(現茅野市・蓼科高原)に疎開し、アトリエを設け、当時同じく疎開していた坪田や童画家武井武雄らとともに、おいしいものを食べる目的の「たらふく会」をつくり、親睦を深めていました。戦後は都内のア

トリエと行き来しながら、童話作家や童画家たちと絆を強めていきます。

一九四六(昭和二一)年には、武井武雄や初山滋とともに日本童画会を立上げます。初期の日本童画会の活動の場は、豊島区内が目立ち、旧豊島師範学校付属小学校を利用して『会報』の編集会議を開き、また、区内デパート会場では展覧会も催しました。



『善太・三平物語』(偕成社文庫)版カバー原画



紙芝居『きしゃいぬ』第1場面原画  
坪田譲治 原作

さらに、坪田作品の挿絵も多く手掛け、名コンビとしても有名となります。主な仕事には、童話『善太・三平物語』(偕成社文庫・一九七七)や坪田による再話『日本昔話全集⑨ふるさとの伝説東日本編』(あかね書房・一九六〇)、紙芝居には、『きしゃいぬ』、『つるのおんがえし』など多数あります。

画家の立場から戦後児童文学の発展に寄与した中尾の業績は、高く評価できるものといえます。この功績を後世に伝える残すため、平成二八年度、豊島区は、中尾の挿絵や紙芝居の原画約二〇〇点を、中尾彰コレクションとして収集しました。なお、今回は、柴田忠弘氏ご協力のもと執筆させていただきました。略儀ながら、ここにお礼申し上げます。

(文学・マンガ 荒川)





# 萬鉄五郎

## あの人もここを歩いた①



萬鉄五郎(二八八五—一九二七)は、大正期から昭和初期にかけて活躍した画家(図1)で、岸田劉生(一九九一—一九二九)とともにこの時期を代表する油彩画家の一人です。東京美術学校の卒業制作《裸体美人》(一九二二年)は、ゴッホやマティスの作風を受容した早い例として知られ、東京国立近代美術館でご覧になった方もあるでしょう。

萬は岩手県土沢の大きな回送問屋に生まれています。名字は本名です。一八歳で上京する前には、『水彩画之葉』という本を通して水彩画を学習していました。早稲田中学に編入した一九〇三(明治三



図1 巣鴨洋画展覧会会場入り口にて 前列左端が萬 1912年1月、萬鉄五郎記念美術館蔵

六)年冬から翌年の秋にかけて豊島区域(現在の豊島区高田)に住み、伯母の勧めで日暮里にあった禅の道場に通いました。その後、東京美術学校西洋画科に学びます。年譜によると転居を重ねていることがわかりますが、そのうち豊島区に住んだのは一回です。

一九〇九(明治四二年、東京美術学校在籍中に結婚した萬は、小石川区(現在の文京区千石)に新居を構えました(図3)。これは豊島区との区境にとっても近い場所です。郷里に一時戻る一九一四(大正三)年まで、ここに暮らしています。

一九二二(明治四五・大正元)年は、その後につながる多くのグループ展が開催された年でした。海外で起きる新しい動向は、『白樺』をはじめとする雑誌の図版や記事によってほどなく日本に伝えられていたほか、留学から帰った人々の作品に刺激を受け、画家たちは自ら信じ感じるままに絵筆を運ぶようになっていました。そのうち、フェウザン会\*というグループの展覧会と出品作が、新しい傾向を示し、あふれるエネルギーを伝えてくれるものとしてよく知られています。萬はこのフェウザン会展の中心メンバー

です。このころの制作と推測されるのが《森の道》(図2)です。短い筆触の積み重ねからは、作家の手の動きが感じられます。運んだ筆の勢いに感情が表れているかのようです。まさにこうした表現が、明治末から大正初期にかけての新しい傾向でありエネルギーなのです。またそのあざやかな色彩には、この時期の萬の好みをみることができま。加えて、こうした活動をし小石川区に暮らした(図3)この時期の萬には、目の前にあった東洋女学校の学生を描いた作品が複数あります。それらの中には、本作がその近辺を描いたのでは、と思わせるものもあります。



図2 萬鉄五郎《森の道》1910年頃、油彩・板、個人蔵 10.2×15.5cm 本作は板の両面に描かれたうちの片面

開催されています。これは豊島区域の仰高小学校(現在の豊島区駒込)での開催でした(図1、3)。萬は、文京区から豊島区まで、折戸通りと中山道の間にある道(江戸橋通り)を、北に上って仰高小学校に歩いていたのでしょうか(想定)。同校は戦災で焼けているため、萬が巣鴨洋画展を開いた時と同じ校舎ではないものの、今も同じ場所に小学校は建っています。同展は一月一日から五日までの開催で、当時の小学校が元日から校舎を貸出していたことにも驚かされます\*2。

収蔵する作品は未だないものの、豊島区に關係する作家はたくさんいます。収蔵作品を紹介する「絵を見る読む」シリーズに加え、「あの人もここを歩いた」と題して紹介してまいります。(美術・小林)



図3

\*1 第一回展開催時はヒュウザン会、第二回からフェウザン会と改称。フェウザンはフランス語で木炭の意。同会は第二回展ののち、解散している。

\*2 巣鴨洋画展の詳細はわかっています。何かご存知の方はご連絡ください。

**2017年度豊島区立郷土資料館・ミュージアム開設準備グループ事業予定  
(2017年4月～2018年3月)**

|                            |   |   |
|----------------------------|---|---|
| 企画展                        | リニューアル企画展「学びと暮らし」(仮称)   | 10月1日(日)～1月28日(日)   |
|                            | リニューアル記念展「アトリエの旅」(仮称)   | 2月6日(火)～3月25日(日)  |
| 庁舎まるごと<br>ミュージアム<br>(3階展示) | 美術分野<br>①「四人展と戦後の池袋モンパルナス」<br>②「アトリエの旅」(仮称)   | ① 7月6日(木)～11月7日(火)<br>② 11月8日(水)～2月28日(水)                           |
|                            | 郷土資料分野<br>①地域紹介「高田編」<br>②「リニューアル展示紹介」(仮称)<br>③地域紹介「池袋編」(仮称)   | ① 5月26日(金)～10月12日(木)<br>② 10月13日(金)～1月25日(木)<br>③ 1月26日(金)～5月10日(木) |
|                            | 文学・マンガ分野<br>①「山手樹一郎と豊島区」<br>②「70-50周年記念 永井豪と豊島区」<br>③「野村胡堂と豊島区」(仮称)                                       | ① 4月1日(金)～7月31日(月)<br>② 8月1日(火)～11月30日(木)<br>③ 12月1日(金)～3月30日(金)    |
| 講座・講演・<br>見学会など            | 第12回 新池袋モンパルナス西口まちかど回遊美術館<br>関連事業 アトリエ村さんぽ道 区境を行くシリーズ3<br>「池袋から落合まで アトリエと文化村を訪ねる」<br>講師：本田晴彦氏(アトリエ村資料室代表) | 5月28日(日) 午後   |
|                            | 豊島区ミュージアム開設イベント第6弾<br>「豊島ミュージアム講座」(全4回)   | 3月3日、10日、17日、24日<br>土曜日午後   |
| 刊行物                        | 郷土資料館・ミュージアム開設準備だより<br>「かたりべ」124号～127号  | 年4回、2,200部、無料頒布<br>7月・9月・12月・3月刊行予定                                 |
|                            | 研究紀要「生活と文化」第27号<br>付・2016年度年報   | 3月刊行予定<br>500部 有償頒布   |
|                            | リニューアル記念展パンフレットほか   | 10月、2月刊行予定  |

※都合により事業内容や日程を変更する場合があります。  
※事業の詳細は、『広報としま』または当館のホームページで随時お知らせいたします。

**研究紀要『生活と文化』第26号 付・2015年度年報 価格1,100円 2017年3月発行**

※郷土資料館事務所(としま産業振興プラザ7階)・行政情報コーナー(区役所4階)にて頒布

- |                                    |      |
|------------------------------------|------|
| 「中世豊島郡の宗教構造に関する基礎的考察一郡北部地域を中心に一」   | 小山貴子 |
| 「【資料紹介】「高田地区関連文書類」の概要について」         | 高木謙一 |
| 「豊島区消防小史一消防組を中心に一」                 | 松浦瑛士 |
| 「学童集団疎開(六)熾烈化する空襲、疎開延長・皇后の菓子・進学問題」 | 青木哲夫 |
| 「吉井忠と東北一戦争がもたらした表現の差異について一」        | 清水智世 |



**かたりべ**  
No. 124  
2017年7月7日  
豊島区立郷土資料館  
東京都豊島区西池袋2-37-4  
としま産業振興プラザ7階  
電話 03-3980-2351  
URL: <http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/shiryokan>

**編集後記**

「かたりべ」一二四号をお届けします。南大塚の仮事務所から郷土資料館とミュージアム開設準備・学芸グループが西池袋に移転して、はや二か月が経ちました。

実のところ、資料や図書の移転作業は一月一日のリニューアルオープンに向けてまだまだ続いています。残り三か月、鋭意準備を進めておりますのでご期待ください。事務所はかつてと同じ場所に戻ってきましたが、入居する建物の名称が三〇年以上親しまれた「キンブク」こと「勤労福祉会館」からリニューアル工事を経て、「イケビズ」こと「としま産業振興プラザ」に変更となりました。職員も、まだ慣れていないのが正直なところですが、新しい豊島区立郷土資料館の住所は「豊島区西池袋二一三七-四」としま産業振興プラザ7階となります。似た名称の区施設としては、「豊島区立生活産業プラザ」がありますが、こちらは池袋駅を挟んで反対の東池袋になりますので、ご注意ください。

「かたりべ」は今年も、幅広く皆様の調査・研究や学習支援に役立つことを目指し、年四回の発行を予定しておりますので、ご愛読のほどお願い申し上げます。

(郷土 甲田)